

農民工からみた中国社会

——ある一枚の写真から読み解く中国社会——

原田忠直

はじめに

写真1は、私の教え子（女性、一九九三年生まれ）が、浙江省海寧市の街中で撮影したものである。彼女がこの風景をおさめようと思った動機は、日本ではお目にかかれないう三輪車タクシーに興味をひかれたわけではない。また、後ろに映る銀行を記録するためでもない。ただ、三輪車タクシーの運転手が気持ちよく「昼寝をしている姿」に心が躍ったからだ。「どうして、こんな写真を？」と尋ねると、「日本では、ありえない光景だから」という。

彼女は、学生時代、何度も中国に足を運び「ありえない光景」、たとえば、写真1の「昼寝」と同じく、バスターミ



ナルの清掃員のおばさんが待合室のベンチで（写真2参照）、ホテルの従業員がフロント脇のソファアール（写真3参照）、レストランの従業員が掛け布団まで用意して店内の長いすで、リヤカー運転手が荷台で、仕事中に気持ちよさ



写真1

と。「中国は遅れているんだよ」と答えれば、「なに？ その上から目線、答えになっていない」と反論される。また、「文化の違いだよ」といえば、Z・バウマンの愛読者でもある彼女は、「いつから多文化主義者になったの？」と攻め立ててくる。⁽²⁾

では、どこに正解はあるのか。それを見出すことが、本稿の主な目的である。ただし、中国社会において「感情労働」が浸透していない実態及びその背景については、すでに別稿で述べているので「原田 2012, 2014a」、ここでは、「昼寝」についての考察から、中国社会の実像に迫りたい。

一 三輪車タクシの「おじさん」

三輪車タクシで人目をはばからず「昼寝」を楽しむ「おじさん」とは、一体何者なのか。もちろん、私はこの「おじさん」に直接会って、会話を交わしたことはない。だから、あくまで写真の姿から想像するしかないのだが、概ね次のように判断することができる。

第一に、三輪車タクシという仕事、さらに彼の風貌から判断して、「おじさん」は、この写真が撮られた海寧市の都市戸籍保有者ではなく、農村からの出稼ぎ、すなわち、農民工であろう。⁽³⁾ また、年齢は、三〇代後半から四〇代前半であろうか。頬のたるみ具合にやや年齢を感じる

が、腕の筋肉の張り、すつきりとしたお腹をみる限りまだ四〇代手前ではなからうか。⁽⁴⁾

第二に、両脚をサドルにかけ、上半身を後部座席に委ねながら、まったりと眠る「おじさん」はなかなか堂に入っている。余裕すら感じるその姿から、彼の都市での生活は、随分と長期間にわたっているのではないだろうか。彼が、三〇代後半の農民工とすれば、すでに二〇年以上、農民工として生きてきているかもしれない。もちろん、この長い歳月を、ずっと三輪車タクシの運転手として過ごしているとは思えない。多くの農民工がそうであるように、広州、上海、温州などの大都市を始め、さまざまな都市で、建築現場、工場などで働いた経験を持っているのではないだろうか。しかし、のんびりと「昼寝」をしている姿から、三輪車タクシが、彼にとつての出稼ぎ生活の終着点、あるいは彼がやっと手にした目的地と判断することはできない。少しでも条件の良い仕事があれば、「おじさん」は、明日にでも転職するであろうし、その場所が、海寧市ではある必然性はどこにもない。

第三に、「おじさん」の学歴は、いかほどであろうか。三輪車タクシという仕事、すなわち、肉体労働者であることを鑑みれば、中卒または中学退学者（小卒レベル）とみるのが妥当だろう。⁽⁵⁾ ただし、肉体労働者だからといって、「おじさん」を低学歴者と決めつけるのはやや早計で

ある。なぜならば、三輪車タクシーは、一方で肉体労働であるが、他方においては、「自営業者」あるいは「請負者」（自営業者と請負者の違いについては以下で詳しくみる）である。私が、これまで実施してきた農民工調査では、高卒以上の比較的学歴水準の高い層でも、「自営業者」や「請負者」として「将来、商売で成功したい」と希望する人は決して少なくない。それゆえ、「おじさん」も、実は、故郷の高校を卒業し、その後、しばらくは工場などで賃金労働者として働いていたが、「商売で成功したい」という希望を捨てきれず、まずは、手軽な三輪車タクシーの仕事から始め、「将来の成功」のための一歩を踏み出したと考えているかもしれない。

第四に、「おじさん」は、三輪車タクシーを所有しているのだろうか。もし「所有者」であれば、彼は立派な自営業者に分類されるだろう。しかし、タクシーの運転手や「黒車」（白タク）の運転手たちと同じように、「請負者」である可能性は高い。実際、海寧市の街中で、私は、三輪車タクシーの運転手が、街路樹や建物を囲む格子に三輪車タクシーを鍵でくくりつけ立ち去ったあと、しばらくすると別の「おじさん」や「おばさん」が現れ、合いカギで三輪車タクシーを外し、仕事に向かう姿を何度も目撃したことがある。つまり、「おじさん」が「昼寝」を楽しむ三輪車タクシーも、誰か別の人と共同で利用しているとみてよ

いだろう。そして、彼らは、三輪車タクシーの「所有者」（会社か個人）に毎月あるいは毎週、決められた使用料を支払うこと⁽⁶⁾によって始めて、お金を稼ぐことが許されているのだろう。

第五に、海寧市における三輪車タクシーの毎月の収入はおおよそ三五〇〇〜四五〇〇元だという。逆算すれば、少なくとも一日の売上げは一二〇元程度であろう。当たり前だが、三輪車タクシーで遠方まで行くことを求めるような利用者はあまりいない。せいぜい、バスで二〜三区程度の短い距離、おおよそ一キロメートル、長くて三キロメートル程度の移動時に利用するケースが一般的である。そのため、一回の売上げは必ずしも高くはない。七〜一〇元程度が相場であろう。仮に一回七元とすれば、一日の売上げを稼ぐためには、一五回前後、距離にすれば二〇キロメートル以上も、後ろにお客を載せてペダルを踏み続ける必要がある。

第六に、三輪車タクシーを利用すると、しばしば身の危険を感じることもある。そもそも三輪車タクシー専用の道路があるわけではなく、舗道、自転車専用レーン、車道、そのいずれかに少しでも空いた隙間があれば、三輪車タクシーはかなり強引に割り込んでいく。自転車や自動車とぶつかりそうになること、通行人と接触しそうになることは日常茶飯事である。つまり、三輪車タクシーの運転手は

(もちろんお客も同様に)、事故といつも隣り合わせであるといつても過言ではない。もちろん、被害者になる可能性もあるが、加害者になることもある。しかし、運転手が、保険に加入しているケースはほぼないであろう。また、三輪車タクシীর「所有者」が、運転手のために保険料を負担していることは皆無であろう。同様に失業保険にも加入していないだろう。なぜならば、明日辞めてしまうかもしれない仕事、さらに上述したように、次の仕事別の都市である可能性もあるなかで、保険料を支払っていることを想像するのは難しい。また、三輪車タクシীর「所有者」からみれば、「おじさん」は従業員ではなく、あくまで「請負者」にほかならず、保険加入の義務はないと考えているのではないだろうか。保険に加入しない理由を挙げれば他の理由もあるだろうが、いずれにせよ、事故に遭ったり、事故を起こしたり、または、事故に遭遇しなくても、病気になるたりすれば、彼の未来は、突然暗闇のなかに引きずり込まれることになる。

以上、「おじさん」の素性、仕事についてみてきたが、その評価については、次節以降で詳しく述べるとし、次に、「おじさん」の生活を少し覗いてみよう。

第一に、「おじさん」の年齢から判断し、既婚者である可能性は高い。子どもは、二人から三人、あるいは出稼ぎ期間が長期化していれば、四人以上いても不思議では

ない。また、彼の妻の年齢が彼と同じくらいかそれ以下であれば、さらに子どもをつくることもできるだろう。もちろん、現在、彼が、家族と一緒に海寧市で生活しているかどうかは定かではない。ただし、海寧市には都市住民が通学する学校にも農民工の子どもたちは通学することができ、市内には三つの民工学校があり、家族と一緒に生活できる環境は整っている。

第二に、建築労働者や工場労働者であれば、宿舍が確保されていることもあるが、「おじさん」のような「請負者」または「自営業者」として働いている農民工は、農家の一室を借りて生活するケースが一般的である。海寧市では、急速な都市化の進展とともに、多くの海寧市の地元農民が農地を失った。しかし、その補償として農民には三々四階建ての一戸建て住宅が、政府から与えられた。地元農民たちは、自分たちの生活スペースを二階以上に確保し、一階の部屋を農民工たちに貸出し、部屋貸しビジネスに勤しんでいる。部屋の大きさや立地条件にもよるが、部屋代は、おおよそ一カ月四〇〇〜五〇〇元が相場である。そして、農民工たちは、決して広いとはいえない部屋で家族または仲間たちと肩を寄せ合いながら生活を送っている。

第三に、毎日、少なくとも二〇キロメートルも三輪車タクシーを運転する「おじさん」は、その仕事の過酷さゆえに、仕事が終われば、まっすぐに借家に戻り、夏ならば、

頭から水をかぶり（冬ならば週に数回銭湯に足を運び）、さっぱりしたのち、食事を簡単に済ませ、ベッドに横たわりながら、テレビを見て、知らず知らずのうちに深い眠りに落ち、翌朝、また、仕事に向かう、というような単調な生活を送っているのではないか、と想像するのは容易い。または、故郷の両親、家族への仕送り、あるいは、将来、子どもの教育費や「商売を始めるため」の資金を貯めるため、慎ましい生活を自ら率先して送っているのだろうと、想像することもできる。実際、「おじさん」の一週間の食事のうち、数回はカップ麺で安く済まされていることだろう。しかし、「おじさん」の日常は、ただ、仕事場とベッドの往復、いつもカップ麺を食べているだけの日々と捉えることはできない。少なくとも、「おじさん」の生活空間のなかには、多くの親戚、同郷人、隣人、さらに仕事仲間が多数存在しているだろう。仲間たちと一緒に食事をし、酒を飲み、ゲームに興じ、そして、語らいながら、時に笑い、時に言い争いながら、日々の生活を送っているのではないだろうか。

第四に、「おじさん」の交友関係は、地縁・血縁者、海寧市に来てから知り合った農民工、すなわち、境遇をともにする人びとだけに限られているわけではないだろう。「おじさん」の友人・知人のなかには、海寧市の地元住民が含まれていたとしても不思議ではない。私は、数年前、

部屋貸しビジネスを営む家主（地元農民）に次のような話を聞いたことがある。その家主は、部屋を借りている農民工たちが、仕事から帰ってくると、軒先で宴会を始め、毎晩のように酔っ払う姿をみて、「お酒ばかり飲んでると、いつまでたつてもお金が溜まらないから、もっと質素な生活を送ったらどうだ」と注意したという。すると、農民工たちは、その顔に怪訝さを浮かべることもなく、笑顔で家主を手招きし、テーブルに座らせ、「一緒に飲もう」とコップに白酒をなみなみ注いだ。そして、農民工たちは、家主に、「人生を楽しもうよ」と切り出し、乾杯を繰り返し、家主も酔うほどに「人生の送り方」について考えを改めざるを得なかった、と語ってくれた。言うまでもなく、家主は、その日之境に自らも時折宴会を主催し、農民工や彼の友人・知人が入り混じりながら楽しい時を過ごしているという。もっとも、家主と農民工の両者は、もともと農民という点で共通しているが、家主は、たまたま開発によって農地を失い、その補償として一軒家が与えられ、何の苦勞もなく収入（家賃）を手にすることができ、まさに「棚からボタ餅」のような幸運な人生を過ごしている。それに対して、農民工は必死に働き、家賃を納めているわけだから、家主の恵まれた境遇に嫉妬したとしてもおかしくはない。少なくとも両者の間に横たわる不条理、あるいは待遇の格差に、社会的な矛盾を農民工たちが

見出すことは容易い。その上、家主のなかには（家主に限らず都市住民といった方が正確だが）、あからさまに農民工を嫌い、まるで汚いものに触るような態度で接する人びとも少なからず存在している。すなわち、客観的にみれば、両者が対峙する瞬間、中国社会が内包する大きな矛盾の導火線に火がつけられてしまうのではないかという不安がつきまとう。しかし、実際は、もちろん、両者の矛盾点はそのまま存在しているという事実は何ひとつの変更が加えられることはないが、言い争い、殴り合うような事態が生じることはなく、両者はいとも簡単に不条理な「壁」を乗り越えているケースが少なくないようだ。

第五に、三輪車タクシートの「おじさん」の生活を想像すれば、それは、「楽ではない」が、「楽しく」もあるといえるであろう。言い換えれば、「おじさん」は、中国社会の一つの矛盾点に立脚しているが、だからといって、日常生活のなかで、その矛盾が体内に蓄積し、その重さゆえに身動きがとれなくなってしまうわけではない。ただ、時折、彼も、その矛盾に悩み、迷わずにいられない時があるだろう。その「迷い」の中心とは、家族の問題である。子育てを故郷でするのか、都市でするのか、たとえ、都市で家族と一緒に生活していたとしても、いつまで続けるのか、いつまでも都市で生活することができるのか、といった深い悩みを抱えていることだろう。そして、いうまでも

なく、中国社会の一つの矛盾の発生源ともいうべき戸籍制度が、「おじさん」の悩みをより複雑にしている。さらに、これまでは、自分の家族の行く末だけを考えていればよかったのだが、「おじさん」のように四〇代に近づくと、両親の「老い」という問題が加わることになる。年若いゆくり両親を、誰が、どこで面倒をみるべきなのか。¹⁵この新たな「悩みの種」は、農民工の「迷い」を増幅させることは間違いないだろう。

以上、三輪車タクシートの「おじさん」を中心に、農民工の日々の生活、さらには、彼らの「悩み」などをみてきたが、このような実態を、どのように受け止めるべきなのか。「楽ではない」という面を強調すべきなのか。それとも、「楽しい」という面をさらに深く考察すべきなのか。次節では、「おじさん」をどのように捉えれば、中国社会の実像に迫ることができるのか、少し立ち入って考えてみたい。

二 「おじさん」の二面性

三輪車タクシード眠り続ける「おじさん」が、どのような夢をみているのか、それを知ることができない。しかし、眠りに落ちる数分前、彼の頭のなかによぎる思いを想像することはできるだろう。

たとえば、「おじさん」は、自らの低学歴を嘆き、「こん

な人生を送るつもりはなかった」と、どこかに怒りをぶつけたい気持ちで一杯かもしれない。また、学校では勉強はしなかったが、出稼ぎ生活を通して、社会で生きていくための能力を身につけた。その能力は、海寧市の地元住民と比べ決して見劣りしないはずなのに、「どうして、こんなにも待遇が違うのか」、「どうして貧しい農村に生まれてしまったのか」と自らの運命に腹を立てているかもしれない。

さらに、これまでたくさん汗を流し、経済成長に多少は貢献しているはずなのに、「どうして、国家は、家族と一緒に暮らすことすら許してくれないのか」、「せめて、年老いてゆく両親の世話を助けて欲しい」と人民政府の門に立ち大きな声で訴えている自らの姿を思い描いているかもしれない。もちろん、このように怒り、焦り、恨みのような感情だけが、彼の空想を支配しているわけではなく、もっと、楽しい瞑想に浸っていることもあるだろう。三輪車タクシートの仕事を辞め、新しく商売を始めたら、ことのほか大成功を収め、海寧市のマンションを、それも最上階の一室を購入し、高級ソファで「中華」をふかしている姿を夢見ているかもしれない。そして、その紫煙の先で、妻、子どもたち、それに両親が楽しそうに会話をしている。するとそこに、役人がやってきて、海寧市の都市戸籍を「申請して下さい」といわれ、「いやいや、都市戸籍になると、故郷の土地を失ってしまうし、子どももまだまだ

欲しいから、農村戸籍のままがいいです」と丁寧にお誘いを断っている自分の姿を想像し、心のなかで笑っているかもしれない。もっとも、こんな大きな夢ではなく、今晚の夕食は、家族と一緒にレストランで食べようかと思いい、早々に瞑想を切り上げ、妻に電話をかけ、ついでに友達の家族も誘い、賑やかな食卓に思いを馳せながら再び眠りに落ちていくかもしれない。

想像は尽きない。しかし、この想像から、何を読み取らなければならぬのか。農民工という視点から中国社会を捉えようとする場合、「おじさん」が抱くであろうと想像した怒り、焦り、恨みといった感情は、「格差社会」という言葉に置き換えられることが多い。とりわけ、中国に対して強い反感を抱く人びとは、農民工は格差に苦しむ存在と決めつけ、そして、彼らを中国共産党の矛盾をもっとも体現した人びと、または「遅れた社会」のシンボルとして奉り上げようとする。経済成長の陰で、幸せを奪われ、体制に抵抗することもできず、ただ、蝕まれていく農民工に同情を示しつつ、その手を返して厳しく中国共産党、政府批判を繰り返す。また、すべての元凶は、「農村の貧しさ」、「戸籍制度」にあるとし、その改善を求め、それが成し遂げられなければ、中国の近代化はまだ道半ばであり、いつまでも世界のなかで「遅れた恥ずかしい存在」であるという。

表1 学歴水準からみた就業形態

学歴水準		雇用者	被雇用者	自営業者	家庭内労働（無給）
全体	100.0	48.7	4.0	44.7	2.6
未就学	100.0	13.2	0.8	83.5	2.4
小学	100.0	20.6	2.2	74.9	2.4
中学	100.0	41.6	4.1	51.2	3.1
高校	100.0	66.6	6.4	24.1	2.9
大学専科	100.0	88.9	4.4	5.6	1.1
大学本科	100.0	94.3	3.1	2.1	0.5
研究生以上	100.0	96.4	2.1	1.4	0.1

出所：『2014年 中国人口和就業統計年鑑』（中国統計出版社、2014年11月）より作成。

表2 就業形態からみた学歴水準

学歴水準		雇用者	被雇用者	自営業者	家庭内労働（無給）
全体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
未就学	1.9	0.5	0.4	3.6	1.8
小学	18.5	7.8	9.8	30.9	17.4
中学	47.9	48.9	48.9	54.9	57.3
高校	17.1	27.2	27.2	9.2	19.0
大学専科	8.5	9.2	9.2	1.1	3.5
大学本科	5.5	4.2	4.2	0.3	1.1
研究生以上	0.5	0.3	0.3	0.0	0.0

出所：表1に同じ。

しかし、もっと視線を下げれば、「おじさん」の異なる姿を見出すことはそれほど難しくもない。とりわけ、中国で農民工に直接会って話さなくても、街中を歩いていけば、街の「活気」、人びとが醸し出すエネルギーを感じずにはいられない。もちろん、そのすさまじいまでのエネルギーのすべてを、農民工が生み出しているわけではないが、活気に満ちた街中で、格差を嘆くような農民工を発見することは難しいのではないだろうか。さらに、農民工たちが、都市の片隅で、「一人っ子政策」に反して何人もの子どもを生み育て、または、「黒車」（白タク）のように体制からはみ出し生きている農民工たちの姿に、彼らが手にする「自由」を発見し、さらに彼らの「したたかさ」あるいは中国共産党という巨大な組織すらも相対化できる力強さを感じずにはいられない。

このように農民工の捉え方は、捉える場所によって大きく異なる。さらに、この違いを明らかにしてみたい。表1と表2は、学歴水準と就業状況の関連性についての調

査結果を示したものである（この調査は、農民工をだけを対象にしたものではないが、学歴水準をみると、中卒以下が七割弱を占めており、多くの農民工が含まれているのではないかと思われる）。この二つの表から明らかかな点は、「自営業者」は、低学歴者によって多くが占められているということである。そして、この事実を、上述した二つの視点から解釈すれば、次のようにそれぞれ指摘できる。

一つは、低学歴だから、「会社員」や「労働者」として働くことはできないという見方である。つまり、これら表から、「読み・書き・そろばん」もまともにできない低学歴な農民工たちは、雇用してもらえないという事実を読み取ることができる。そのため、収入が不安定で、何の補償もなく、自分の身一つでお金を稼ぐ「自営業者」しか生きる道は残されていないと判断することも可能である。言い換えれば、低学歴な「自営業者」とは、経済成長の波に乗り遅れた農民工たちのセーフティ・ネットにほかならず、経済成長のおこぼれを、多くの貧しい人びとが分け合っているとみることもできるだろう。あるいは、三輪車タクシーの「おじさん」のようなインフォーマル・セクターともいえる雑業に従事する一群は、学歴水準の向上に伴い（または、成人教育のなかで、技術や知識を習得させ）、立派な「会社員」「技術者」「労働者」に育てることが、経済発展をより促進させ、それが国家として望ましい姿である

という見解を導き出すことも可能であろう。

もう一つは、農民工たちが、「会社員」や「労働者」として働くことを望まず、「自営業者」になることを希望していたとしたら、これらの表は、多くの人びとの希望が実現されていることを如実に物語ることになる。そして、希望が実現されているのであれば、学歴水準、戸籍制度などの諸問題は、彼らにとつて、人生を大きく左右する要因ではないと受け止められていても不思議ではない。言い換えれば、低学歴であること、農村戸籍であることによつて、多くの機会を奪われていると判断するのは、やや早計ともいえるであろう。実際、藩沢泉 [2013: 361-362] は、広東省や湖南省などで実施した農民工に対するアンケート調査結果から、「相対的剥奪感」を強く抱いているのは、全体の二割弱に過ぎず、大半の農民工は、「相対的剥奪感」をあまり感じていないと指摘している。

果たして、いずれの見解が、農民工の、「おじさん」の捉え方として、より実態に近いのだろうか。次節では、中兼和津次が捉える「中国」を一つのガイドラインとして、さらに考察を深めてみたい。

三 「おじさん」の捉え方

中兼和津次は、その著『開発経済学と現代中国』のなか

で、「センのような開発哲学から、中国のような抑圧的開発独裁を評価すればどうなるのだろうか?」、「開発独裁体制が政治的抑圧を伴うから、センの基準からすれば、真の意味で開発していることにはならないのではないか?」と自問する【中兼 2012: 246】。

中兼がいう「センのような開発哲学」とは、「人びとの自由や安心を実現すること」が開発の目的となり、「人々の持つ潜在的な能力を可能なものにしていくことこそが開発」であるとしつつも【中兼 2012: 245】。言い換えれば、開発の目的とは、単に物質的な豊かさだけが求められるのではなく、人びとの潜在能力が発揮される状況を作り出し、さらに、政治的自由、民主主義的価値が実現されることを意味する。そして、このような開発哲学を中国に当てはめてみれば、改革・開放以降、著しい経済成長に伴い、生活状況は改善され、物質的な豊かさを多くの中国人が手にしていることは、誰もが認める事実であろう。しかし、政治的に中国共産党が支配するなかで、政治的自由はあるのか、あるいは民主主義的価値は根付いたかと問われれば、否定的にならざるを得ない。それゆえ、中兼の問いは、的を得たものであるとともに、多くの人びとに共感されるものであろう。

ただし、中兼は、中国には政治的自由または民主主義に問題があるとしながらも、中国における開発を頭越しに失

敗または間違っていると決めつけているわけではない。むしろ彼は、中国を「真の意味で開発していることにはならないのではないか?」という自問に対して、「単純にそう結論するわけにはいかない」としている。そして、中兼は、「少数の人々の、たとえば言論という潜在能力が奪われていたとしても、大多数の人々にとって別の意味でのそうした機会が保障されるのなら、全体としては開発||自由を得たことにならないだろうか?」【中兼 2012: 246】とさらに問いを深める。

この問いかけは、まさに中国を熟知したもののだけが発することができるといえる。中兼が、これまでに三輪車タクシーを利用したかどうか、または、街中の「昼寝」に目を留めたことがあるかどうか知る由もない。しかし、私が、「昼寝」をする「おじさん」の写真を手に取り、あるいは中国の街中で感じる「活気」「エネルギー」に触れた時、中兼と同じく、中国社会は、「全体として開発||自由を得たことにならないだろうか?」と問わずにはいられない。

ただし、この問いかけに対する中兼の答えは、必ずしも現在の中国を描き切ったとはいえず、その将来像に曖昧さが残る。中兼は、次のように結論づける。すなわち、「非常に長期の歴史スパンで見たとき、政治的自由を犠牲にしても経済成長と豊かさを追求することに比較的満足していた平均的中国人も、いつかは「人はパンのみに生きるにあ

らず」と気づき、そして自らの潜在的な要求を主張するようになるかもしれない。またその前に、どのようなメカニズムによるものか今のところよく分かっていないが、政治的自由の欠如が制度設計の障害となり、経済発展の桎梏になる可能性も否定できない」〔中兼 2012: 247〕。

残念ながら、この結論に対して、「肯定も否定もできない」と言わざるを得ない。中兼は、他の中国研究者と同じく、中国社会を踏破するなかで、彼が出会った多くの人と、または彼が垣間見た人びとの生活のなかに、「政治的に抑圧された人々の存在」を強く感じる事ができなかったのではないかと。それゆえに、中国を開発経済学の視点で顧みるなかで、「大多数の人々が開発⇨自由を得ているのではないか?」という疑問を露せずにはいられなかったのだらう。だが、彼の結論に、彼自身が抱いた疑問は、「長期的スパン」という言葉のなかに跡形もなくかき消されてしまっている。そして、「平均的中国人」はさらなる自由を求めることになるだろうというややありきたりの将来像を導き出したに過ぎない。あるいは、中兼は、「中国モデル」讃美者たちに与えることを避けるため、また、中国共産党による開発独裁体制を評価しすぎないため、言い換えれば、自らの立ち位置を指し示す結論を用意しただけにも映る。

何故、中兼は、曖昧な結論に留まったのだろうか。その

要因として、次の二点が指摘できる。

第一に、中兼は、民主主義をあまりにも神聖化しすぎたのではないだろうか。もちろん、センの開発哲学のなかで、民主主義の概念は非常に重要な位置を占めていることに間違いはない（たとえば、民主主義的な国家や地域において飢饉が発生していないという事実をセンは繰り返し指摘している）。だが、民主主義の神聖化、あるいは民主主義を一つの到達点に据えた瞬間、センのいう潜在能力の意味は狭隘化を余儀なくされてしまう。言い換えれば、「大多数の人々が開発⇨自由を得ているのではないか?」に含まれる「自由」についての分析および議論は停止してしまう。そして、こうした「自由」についての分析をなおざりにして、ただ人びとの生活が豊かになれば、やがて民主主義の実現に向けた政治的な要求が高まるだろうとする論理展開は科学的とはいえない。そもそもセンのいう潜在能力とは、「人が自らの価値を認める生き方をする事ができる自由」であり〔セン 2000: 338, 345〕、この一節にセンの開発哲学は凝縮されているといっても過言ではない。つまり、三輪車タクシーの「おじさん」が、もちろん彼だけではなく多くの農民工たちが、「人が自らの価値を認める生き方をする事ができる自由」を享受しているのかどうか、問われなければならない。

第二に、中兼は、その分析の立脚点が、揺れすぎている

のではない。確かに、一方では、その視線を市井に生きる「人びと」まで落とし込み、極めて重要な問題提起をしている。しかし、他方で、市井の「人びと」と国家との間で思考し、そこから人びとの「自由」についての結論を導いている。もちろん、「人びと」と国家の間で思考することは重要ではある。しかし、中兼が思考した空間は、問題を提起した場所とあまりにもかけ離れすぎてしまっている。そして、その空間に立った瞬間、「おじさん」の存在、すなわち、彼が提起した問題は跡形もなく消えてしまう。言い換えれば、「人が自らの価値を認める生き方をすることができると自由」を実現するのは、必ずしも国家だけの役割ではないし、国家だけが担うべき必要性はどこにもないはずである。むしろそれは、後述するように社会が、あるいは人びとによって実現されるべきものではないだろうか。つまり、中兼は、国家を念頭に入れた瞬間、そうした社会、人びとといった存在を見失ってしまったのではないだろうか。

では、どの場所に立ち、「おじさん」を捉えるべきなのか。その場所とは、上述した私の教え子が発した「羨ましい」という言葉と「昼寝」を楽しむ「おじさん」との間で、彼を捉えることが大切ではなからうか。その空間で思考することによって、「人が自らの価値を認める生き方をすることができると自由」を捉え、何故、「おじさん」は

「昼寝」を楽しむことができるのか、を考察すべきではないだろうか。そして、その思考の先に、農民工からみた中国社会の実像がはじめて浮かび上がることになるだろう。

四 「おじさん」の「昼寝」

日本社会で、それも二〇歳を超えた「大人」が、人目をばからず「昼寝」を楽しむことができるのは、電車やバスのなか、または大学の講義室くらいだろうか。もともと、「昼寝」を楽しむ彼らも、いざ仕事になれば、しっかりと目を覚まし、たとえ睡魔に襲われても目をこすりながら仕事に勤しむことだろう。何故、日本人は、仕事に眠ることができないのか、と問えば愚問だが、そこには「自由」ではなく、むしろ真逆ともいうべき「拘束」「脅迫」という言葉を感じてしまう。「自由」と仕事は並立せず、「自由」を求めれば、失職を意味するといっても言い過ぎではない。つまり、仕事を失うことに対する「恐怖」は、絶えず「自由」を押しつけ、「解雇の恐怖」から決して逃れることはできないということであろう。ただし、「昼寝」ができない理由を「解雇の恐怖」だけに求めるわけにはいかない。たとえば、次のように問いかけたら、違う理由に辿り着くことができるかもしれない。すなわち、「何を捨てれば、眠ることができるのか」と。地位も名誉

も、仕事も家族も捨て、ホームレスになったとしたら、街中の公園のベンチで、堂々と「昼寝」を楽しむことができののだろうか。しかし、空き缶拾いに精を出すホームレスはしばしば見かけるが、人目をばからず「昼寝」を楽しむ彼らの姿を、少なくとも私はみたことはない。ホームレスといえども、捨てきれない何かが胸の内にあるのだろうか。それを「人としての誇り」だといわれれば、納得しそうになるが、果たして日本社会以外でも通用する理由なのだろうか。むしろ、もし自分がホームレスだったらと考えると、「恥ずかしさ」が先立つような気がしてならない。あるいは、たとえ社会からつまはじきにされた存在であっても、それでもなお、社会の一員として、社会と一体化すること、さらには、カフカが『城』で描いた主人公Kのように「見分けのつかないもの」として社会と一体化することへの希求を消すことはできないのではなからうか。

私の教え子のいう「羨ましき」とは、「昼寝」を楽しむ「おじさん」の姿をみて、もしかして「解雇の恐怖」から解放されているのではないか、また、「見分けのつかないもの」になるための苦労・努力からも解放されているのではないか、という思いがその背後に潜む。もちろん、このような見解は、どこまでも日本社会からみた「おじさん」の姿であり、彼を理解する上で一つの突破口ではあるが、彼のすべてを理解できるわけではない。ここでは、内山完

造が捉えた「中国」を一つのガイドラインとし、さらに考察を深めてみたい。

内山は『両辺倒』[2011: 60-61]のなかで、中国人の特徴を次のように描く。すなわち、「中国の習慣の中に包という制度があつて、日本語には請負制度と訳されて居る。間違いいではない。土木、建築、修理その他何でもこれだけの場所にこれだけの事を何日間に仕上げて何程するかと云う風に何でも請負わせるのである。甚だしいのは包医と云つて、医者が病気を請負うて治すと云うことまである。三度の食事を仕出し屋が請負うて包飯といふなどは、何の不思議もないことである。この包を請負と訳して居るが、私はもう一步踏み込んで区切ることであると云うのである。一戸の家は一つの区切りである。一つの市街に城をつくる（武装と云うことも出来る防壁と見ることも出来るが）大陸地帯での区切りである（村落の堡とか壘とか云う土を堆くしたのも同様）、国境線は大陸の大区切りである。こう考えて来る時に、中国人は中国人として生きる為めには、先ず区切りからやらねばならぬ。ここに中国人が何事にも客観を先ず重視して、その客観との調整の範囲内でのみ主観を考えた、むしろ宿命とも言われる民族的習性がうなずかれるのである」。

このような内山の見解を、上述した「昼寝」についての日本人の反応と比較すれば、おおよそ次のようにまとめる

ことができるだろう。

内山に従えば、中国人にとって、「区切り」とは、広大な中国大陸のある一部を切り取り、その空間を確保することを意味する。ただし、「区切り」の対象は、必ずしも土地などの物理的に存在するものに限られるわけではない。それは、どこまでも概念的なものであり、法的な裏付けなど一切ない。しかし、中国人から見れば、「区切り」は、誰からも干渉されることのない「自分の王国」にほかならない。言い換えれば、国家、社会、他者から相対化された、あるいは、国家や社会とは決して一体化できない空間であり、自らの主観、自らの価値だけによって支配された空間そのものである。つまり、「区切り」とは、「人が自らの価値を認める生き方をする」ことができる自由」を享受するための一つの前提といえよう。そして、「区切り」を確保したうえで、中国人は、「見分けのつかないもの」として生きるのではなく、その空間で主観的に、自らの価値に従いながら、その生を表現することになる。内山がいうように、ここに中国人の民族的習性があるとすれば、中国人とは、自らの自由を求め続ける民族であり、日本人との決定的な違いを容易に発見することができる。

では、こうした違いを念頭に置いて、内山のいう「区切り」から「おじさん」の「昼寝」をみれば、主に次のような点が指摘できる。

第一に、何故、「おじさん」は「昼寝」を楽しむことができるのか。それは、三輪車タクシーという仕事を通して、彼は、一つの「区切り」を確保し、「自国の王様」として君臨しているからだ。それゆえ、「解雇の恐怖」におびえることなく、誰の目もはばかることなく眠り続けることができる。つまり、「昼寝」とは、「おじさん」の一つの主観的な自己表現にほかならない。そして、この「昼寝」という表現に、国家、社会、他者から切り離れた「自由」を確認することができるだろう。もちろん、彼の自己表現は、「昼寝」だけに留まることはない。逆に、「昼寝」を一切せず、一所懸命に働いていたとしても、それは、「恥ずかしい」行為として非難されることはないし、「恥ずかしさ」にいたたまれなくなることもないだろう。言い換えれば、サボっていても、働いていても、どちらでも構わないのだ。ただ、「昼寝」は、街中で「区切り」を、または、「自由」を享受する人びとを発見するための目印に過ぎない。

第二に、「昼寝」が「区切り」を確保した一つのシンボルであるとするれば、上述したように三輪車タクシーの「おじさん」は、「自営業者」であるのか、「請負者」であるのか、定かではないとしたが、この区分はそれほど大きな意味をもたない。つまり、「区切り」とは、私的所有、公的所有といった所有制には、関係なくそれを確保することが

できる。また、私の教え子の写真をみるまでもなく、清掃員のおぼさん、レストランの定員など雇われの身でありながら、彼らは、「区切り」を確保していることになる。すなわち、所有制という視点だけではなく、被雇用者・雇用者という区別もあまり関係ないことになる。おそらく雇用者たちは、彼らに与えられた「仕事」を「区切り」として受け止めているのだらう。たとえば、一日の仕事量を自分なりに「区切り」、それが達成できれば「昼寝」を楽しみ、また、達成できていなくても残りの労働時間を計算して「昼寝」を仕事の途中でも楽しむことができるのだらう。しかし、雇用者たちは、それほど強く「解雇の恐怖」を持ち合わせていないだらうが、だからといって、解雇されない補償はどこにもない。つまり、彼らは、勝手に、あるいは民族的習性から仕事を「区切り」、または自らを「請負者」と判断しているだけであり、彼らの自己表現、または彼らが手にする自由は、不確かな状態のなかにおかれたままであるといえよう。

第三に、内山は、中国人は何よりも「区切り」から始めるとするが、「区切り」を概念的であるとすれば、誰もが頭のなかで「区切り」の空間を確保することは可能であらう。ただし、経済活動に限れば、上述した雇用者たちのように「区切り」は架空のものにすぎない。つまり、経済活動としての確たる「区切り」を、誰もが確保できるわけで

はなく、経済活動についての「自由」を誰もが享受しているとはいえない。こうした現実を顧みれば、上述した表1と表2から「おじさん」を二面的に捉えたが、「経営者」や「社長」の数量は、「区切り」を確保した人びとの数と置き換えることができるであらう。さらに、「区切り」を求めることが、中国人の民族的習性であるとすれば、人びとの「希望」が達成された数値ともいえるであらう。そして、人びとの「希望」が叶えられる背景をみれば、そこに、中国社会の実像が浮かび上がることになる。

第四に、「経営者」や「自営業者」に低学歴者が多くを占めている事実は、何を意味するのだろうか。もちろん、上述したように低学歴だから労働者にはなれない、逆に、「区切り」を求めるならば学歴は必要ない、という極端な二つの見解を導き出すことは容易い。ただし、問題は、将来、教育環境が改善され、学歴水準が向上した時、「区切り」を求める民族的習性に変化が生まれるのか、生まれないのか、という点である。しかし、いうまでもなく、先のことを予測することは難しい。ただ、ここでは、低学歴者が多いという現実だけを直視して考えるしかない。つまり、何故、低学歴であつても、「区切り」を確保することができるのだろうか、または、三輪車タクシーの「おじさん」は、何故、低学歴で、その上、農村戸籍者であつたとしても、どのようにして「区切り」を確保することができる

たのだろうか。とりわけ、今一度、海寧市に戻り、街中に「おじさん」の姿を探し求め、その答えを聞く必要はない。「人間関係を築くことだ」と簡単な答えが返ってくるだけであろう。この人間関係の内容については、ここでは詳しく述べないが、少なくとも、「区切り」を確保できるかどうかの境は、人間関係を持つているかどうかである。つまり、「おじさん」に限らず誰もが口を揃えるだろう。つまり、「区切り」とは、その形成過程において多くの「他者」に依存しなければならぬのだ。具体的にいえば、「他者」から吸収する多様な情報、たとえば、「儲かりそうな仕事は何か」、「資金面で誰か協力してくれる人はいるか」、「高利貸しは誰か」などの情報が必要となる。いうまでもなく、「おじさん」も、海寧市に來たその日から、三輪車タクシーの仕事を始めたわけではあるまい。海寧市で「他者」と交じり合いながら、三輪車タクシーという一つの仕事を発見し、「区切り」を確保することができたのだろう。もつとも、「おじさん」が「昼寝」を楽しむ姿は、ひとたび「区切り」の主に落ち着くと、勝手気ままな「自由」を享受し、まるで他者の存在を無視するかのようにも映る。しかし、「おじさん」が、三輪車タクシーの「区切り」を最終目標とせず、次の「区切り」を目指すならば、「他者」との関係を軽視するようなことはないだろう。さらに、三輪車タクシーの仕事でコツコツと貯めたお金

は、低金利の銀行には預けず、「他者」に貸し出し、または高利貸しに預ける可能性は高い。もちろん、「他者」との関係性を維持すること、さらには資金を貸し出すことは、「区切り」の拡大が目的であり、欲望の最大化にほかならず、どこまでも「おじさん」の個人的な事情である。しかし、それは、同時に「他者」が「区切り」を確保するための前提を作り出すことになる。すなわち、「区切り」を確保し、その下で、享受される「自由」とは、法や制度によって保障されているのではなく、ただ、「他者」、欲望にまみれた「他者」によって成立しているといえよう。

最後に、未来を担う農民や農民工の子どもたちについて触れておこう。私は、二〇一二年五月に江西省のある農村の中学校でヒアリング調査を実施し、次のような数字を教えられ、少々驚いた。その数字とは、「一年生一四五人、二年生一五〇人、三年生一一〇人」である。三年生が、一・二年生に比べて四〇人ほど少ない。校長や三年生の学年主任の話によれば、三年生の生徒が減った理由は、その大半が、「徒弟」になるために義務教育課程を放棄した結果であるという。もちろん、このような三年生の退学者が続出することは、その年に限ったことではなく、毎年繰り返されている。私は、校長たちの嘆きを脇に置き、翌月から、江西省の農村地区と海寧市の民工学校で、中学生を対象にして「徒弟制度」に関するアンケート調査を実施し

た。その結果を端的にいえば、どの学校においても生徒の半数以上は、「徒弟制度」に興味を示し、彼らは、具体的な職種までを挙げてきた。何故、徒弟という伝統的制度に中学生はその身を任せようとするのだろうか。その理由として、貧困であること、既存の学校で学ぶことに魅力を感じないという点も挙げられるが、それ以上に、中学生は、徒弟としてある特定の業種の技術や知識を身につけることが、「区切り」を確保するには、もつとも近道であることとみているからであろう。もちろん、中学を卒業してから徒弟制度を利用するケースもあるだろうが、いづれにせよ、人間関係を形成するには若すぎる中学生にも、「区切り」を確保するための道は社会のなかに用意されているのだ。

以上、内山にしたがい分析を進めてきたが、中兼が指摘する「大多数の人々が開発＝自由を得ているのではないか？」という問いについては、政治的自由を持ち合わせず、むしろ見捨てられた存在ともいわれる農民工ですらも、「区切り」を確保することによって、「自由」を享受している。そして、その「自由」は、国家と対峙して考察すると、その存在は見落とされてしまうが、実際は、「おじさん」のようなどこにでもいる人びと、すなわち「他者」、さらに中国の古層に脈々と継続されている「徒弟」という伝統的な制度によって育まれているといえよう。

おわりに

本稿は、詰まるところ、「おじさん」は「怠け者」で、中国社会のなかの「遅れた恥ずかしい存在」なのか、という問いについての考察である。そして、「おじさん」を憐れみつつも、その責任を国家に求める人びとは、一体、どこから、「おじさん」を見ているのだろうか。随分と、高い場所から、あるいは、まったく異なる社会、たとえば、近代化を成し遂げた高層ビルの窓から眺めているのか。このような違和感を前提として、「おじさん」の目に映る社会とは、一体どんな風景が広がっているのかを確認したに過ぎない。

そして、しがたない三輪車タクシーの運転者である「おじさん」から通してみた社会とは、たとえ低学歴であっても、農村戸籍であっても、貧乏であっても、人びとが「人が自らの価値を認める生き方をすることができる自由」を求める姿、さらに、その「自由」を他者が、あるいは社会に内包された伝統的な制度が、保証している社会に辿り着くことができた。

私の教え子は、本稿を読み終え、「この社会の名前は？」と新たな質問をぶつけてきた。その言葉の背後には、当然、資本主義社会、社会主義社会、共産主義社会などの言

葉では説明できないだろうという思いがある。

では、このような社会をどのように受け止め、どのような名前がこの社会にもっとも相応しいといえるのだろうか。私は、以前、中国の正式名称にも記されている「共和」という言葉が最適ではなからうか、と提言したことはあるが、¹⁸⁾まだまだ確信をもつには至らず、研究は道半ばである。私の教え子同様に、「羨ましい」気持ちが先行し、とくに近年の反中感情の高まりのなかで、「羨ましい」側面を伝えることに没頭しすぎてしまった。また、「羨ましい」という思いが強すぎて、自らの生活においても「おじさん」のような生活を送り続けてしまった。今後は、研究室や自宅での「昼寝」は控え、「名前」についての研究を進めていきたい。

注

〈1〉 彼女は学生時代のアルバイトを通して、ホックシールド [2000] が描いた「感情労働」、またリッツァ [2001, 2003] が描いた「マニュアル化」、それらが徹底された労働現場で、笑顔の強要、単純作業の繰り返し、「お客さま第一主義」など、現代日本のサービス業界に大きな矛盾を感じた。さらに、「やりがい」「いきがい」という言葉にそのかさされて低賃金を受け入れ、不満もなく働く同世代の

若者に違和感を抱かずにはいられなかった。あるいは、山田昌弘 [2004] が指摘する格差社会の底辺に自らが存在していることに気づき、そのことに気づかない同世代の若者たちに苛立たしきすら感じるようになった。そうした若者とは、古市憲寿 [2011] がいう「絶望の国の幸福な若者たち」にほかならないわけであるが、彼女は、自らを「幸福」だとは思わないし、若くもない古市に勝手に定義されることを忌み嫌っている。

〈2〉 Z・パウマンは、「多文化主義」の問題点を次のように指摘している [2014:72-73]。「教育水準が高くて影響力があつて政治的にも重要な階級が、この不確かな時代にどのような価値を育み、どの方向に進むべきかと尋ねられると、決まって答えるのが「多文化主義」である。この回答は「政治的に正しい」地位にまで格上げされ、おまけに根拠も証拠もない公理となつている。つまりは、政治的な進路の選択について検討を加える際の土台となっており、私たちがその助けを借りて考えられることはあつても、それ自体についてはめつたに問うことのない知識となつている」。つまり、本来、相互理解を深め、相互の発展を促進する上で重要なキーワードであつた「多文化主義」は、今では、その本来の意味を失い、知識人たちの異質なものに對する「無関心」を装うための逃げ口上に成り下がり、その結果、格差や貧困などが放置され、グローバルパワーの浸透を助長する結果を招いている。

〈3〉 中国国家統計局が二〇一五年四月二十九日に発表した

「二〇一四年全国農民工臨測調査」(<http://www.stats.gov.cn/>)によれば、二〇一四年、農民工は、前年比一・九%増の二億七三九五万人に達している。また、「本地農民工」(農村の自宅で生活し、近隣で非農業部門に従事している農民工)は一億五七四万人、「外地農民工」(自宅から通勤することが不可能な場所で非農業部門に従事している農民工)は一億六八二一万人。「外地農民工」のうち、家族を故郷に残し単身者として仕事をしている農民工は一億三二四三万人、家族と一緒に都市で生活し仕事をしている農民工は三六七八万人である。このように農民工を分類すること、さらに時間の推移のなかで捉えることは、中国の戸籍制度の緩和の状況、または、地方の経済・社会の成長段階を知るためには、必要不可欠といえよう。たとえば、北京、上海などの大都市への農民工の集積状況、反対に地方の小都市への集積状況を比較すれば、おおよその中国経済の動向を描くことができる。しかし、いうまでもなく本稿は、こうしたマクロ的な農民工の動向から中国社会の一端を垣間見ることが目的ではない。むしろ三輪車タクシの運転手である「おじさん」というたった一人の農民工を通して、中国社会の実態を探ることが本稿の目的である。

〈4〉「二〇一四年全国農民工臨測調査」によれば、年齢別にみた農民工の割合は、「一六〜二〇歳」は三・六%、「二一〜三〇歳」は三〇・二%、「三一〜四〇歳」は二二・八%、「四一〜五〇歳」は二六・四%、「五一歳以上」は一七・一%となっている。また、年齢別の構成比率を二〇一〇年と比

較すると、「一六〜二〇歳」は六・五%から三・六%、「二一〜三〇歳」は三五・九%から三〇・二%、「三一〜四〇歳」は二三・五%から二二・八%、「四一〜五〇歳」は二・二%から二六・四%、「五一歳以上」は二・九%から一七・一%へとそれぞれ推移している。こうした結果から明らかなように近年の農民工の動向として、「農民工の高齢化」傾向がより顕在化している点を指摘できるだろう。「三〇歳以下」の若年層が減少しているのは、この層の絶対的な人口減という明確な要因がある。また、「四一歳以上」の比率が上昇しているのは、一つは「四〇歳以下」の減少に伴い相対的に比率が上がっていることもあるが、もう一つの理由として、この層は、すでに移動した都市で長期間暮らし、半ば定住化状態にあり、言い換えれば、ある程度、勤務先の企業などで一定の地位を確立し、または、商売で成功するなどして、もはや帰郷する必要に迫られていない層が存在し(もちろん、反対に今さら成功を望むことはない)、諦めの胸中にある人びとも少なからず存在している(だろう)、都市に滞留しているケースが増えているのではないかと思われる。

〈5〉「二〇一四年全国農民工臨測調査」によれば、農民工の学歴構成は、「未就学」が一・一%、「小卒」が一四・八%、「中卒」が六〇・三%、「高卒」が一六・五%、「専門学校以上」が七・三%となっている。近年、「高卒」以上の割合が増加傾向を示しているが、依然として、「中卒」以下の低学歴層が七六・二%を占め、農民工の学歴水準は低い。

〈6〉海寧市の民工学校に通う父兄に対して実施したアンケート調査において「原田 2013」、「商売を始めたか」（すでに商売を始めている自営業者に対しては、今後、さらに別の商売を始めるつもりはあるかどうかを質問した）という質問の結果は次のとおり。「非常に始めたい」は一五人（一六・九％）、「機会があれば始めたい」は三〇二人（四四・三％）、「あまりそう思わない」は五七人（八・四％）、「まったくそう思わない」は三〇人（四・四％）、「どちらともいえない」は一二人（二・四％）となっている（「不明」は六五人、九・五％）。このように約六割強（六一・二％）の人びとが将来、「商売を始めたい」とし、逆に、商売を始めることに対して、否定的なのはわずか一割強（一二・八％）しか存在していない（「不明」を含めてもその割合は二割強にすぎない）。

〈7〉海寧市の場合は、以下のとおりである。海寧市における三輪車タクシーの営業には、必ずナンバープレートが必要である。現在（二〇一五年九月）、四〇〇台分のプレートが発行されているという。このプレートの持ち主は基本的に海寧市戸籍者であり、農民工は、持ち主に毎月おおよそ二〇〇〜三〇〇元程度の「使用料」を支払っている。

〈8〉二〇一四年全国農民工臨測調査¹¹によれば、農民工の保険加入率は次のとおりである。「労災保険」は二六・三％、「医療保険」は七・八％、「養老保険」は一六・七％、「失業保険」は一〇・五％、「生育保険」は七八％であり、いずれも低い加入率にとどまっている。

〈9〉私が一九九九年に上海で行った調査結果では（対象者は一九四人）、「子供は何人か」という問いに対して、「二人」が八〇人（四一・二％）でもっとも多く、次いで、「三人」が五〇人（二五・八％）、「一人」が四〇人（二〇・六％）、そして、「四人以上」が一九人（九・八％）と回答していた（「不明」は五人、二・六％）。また、二〇〇一年に同じく上海で行った調査結果では（対象者は一五一人）、「兄弟の数は何人か」という問いに対して、「二人」が四七人（三一・一％）でもっとも多く、次いで、「一人」が四五人（二九・八％）、「〇人」が二三人（一五・二％）、「三人」が二〇人（一三・二％）、そして、「四人以上」が一人（九・三％）と回答していた（「不明」は二人、九・三％）（詳細は原田 [2009: 73] 参照）。さらに、海寧市で二〇〇九年に農民工（二四〇人）に対して「出産の自由」について行った調査結果をみると「原田 2010」、「非常にある」は四・六％、「ある」は二八・八％、「どちらともいえない」は二九・二％、「あまりない」は一四・六％、「まったくない」は一八・八％となっていた（「不明」は四・二％）。

〈10〉二〇一五年七月現在、海寧市には三つの民工学校がある。それぞれの学校の規模は異なるが、三校で約三五〇〇人の農民工の子どもたちが通学している。海寧市における民工学校の運営実態については汪希望 [2012] が詳しい。

〈11〉二〇一四年凶解農民工那些事¹²によれば (<http://www.stats.gov.cn/>)、農家などの部屋を間借りして生活しているケースは全体の三六・九％を占めている。

〈12〉海寧市で実施した調査「原田2013」に基づき農民工と「地縁・血縁者」及び「仕事仲間」などとの関係性は以下のとおり。血縁者との連絡（主に電話連絡）の状況をみると、「頻繁に連絡する」は二六五人（三八・九％）、「週に一回程度」は一八五人（二七・二％）、「月に一回程度」は一四五人（二一・三％）、「半年に一回程度」は二九人（四・三％）、「年に一回程度」は三〇人（四・四％）、「まったく連絡しない」は二二人（一・八％）となっている。「不明」は一五人、二・二％。このように一週間に一回から数回、血縁者と頻繁に連絡を取っている人びとは、全体の六割以上（六六・一％）を占め、血縁者との密接な関係が浮かび上がる。また、結婚式や出産祝いなどの「一族の集まり」への参加度をみると、「必ず出席する」は三五一人（五一・五％）、「出来る限り出席する」は二〇八人（三〇・五％）、「あまり出席しない」は七二人（一〇・六％）、「まったく出席しない」は三四人（五・〇％）となっている。「不明」は一六人、二・三％。このようにほぼ半数は、一族の集まりに「必ず出席する」とし、さらに「出来る限り出席する」を含めれば八割強（八二・〇％）に達している。海寧市で仕事を通して知り合った「友人・知人」をみると、「一人もない」は一三七人（二〇・一％）、「一〇人未満」は二四一人（三五・二％）、「一〇～二〇人未満」は八六人（一二・六％）、「二〇人以上」は一九七人（二八・九％）となっている。「不明」は二〇人、二・九％。このように仕事上の友人・知人が「二人もない」とする回答者は、二

割程度を占めるにすぎず、全体的にみれば、仕事を通しての「人間関係」は形成されていると判断できる。海寧市で仕事以外の「友人・知人」をみると、「一人もない」は一六五人（二四・二％）、「一〇～二〇人未満」は二四八人（三六・四％）、「一〇～二〇人未満」は九六人（一四・一％）、「二〇人以上」は一五二人（二二・三％）となっている。「不明」は二〇人、二・九％。このように「一人もない」と回答したのは、二割強を占めているにすぎず、回答者の多くは、隣人、または趣味を通して人間関係が形成されている。

〈13〉海寧市で実施した調査「原田2013」に基づき農民工の「宴会」を主催する頻度をみると、「一週間に一回以上」は一七五人（二五・七％）、「月に数回」は三七三人（五四・八％）、「年に数回」は五三人（七・八％）、「まったくない」は五三人（七・八％）となっている。「不明」は二七人、四・〇％。このように「一週間に一回以上」と「月に数回」を合わせると、全体の八割（八〇・五％）を占め、彼らは、自ら進んで「宴会」を開き、多くの友人・知人たちと食卓を囲んでいる姿を想像することができる。また、「宴会」は、主宰するだけでなく、逆に、誘われることもあるが、「宴会」への参加度をみると、「週に二回以上」は九六人（一四・一％）、「週に一回程度」は一〇九（一六・〇％）、「二週間に一回程度」は七五人（一一・〇％）、「一カ月に一回程度」は一一四人（一六・七％）、「二年に数回」は一四六人（二一・四％）、「まったくない」

は二〇二人（一五・〇％）となっている（「不明」は三九人、五・七％）。「宴会」を主催する回数と比較すると、参加の回数は落ちるが、それでも一週間に一回以上「宴会」に呼ばれているケースがほぼ三割を占め、主催する回数を含めれば、積極的に交流が行われているといえるだろう。

〈14〉海寧市で実施した調査「原田2013」に基づき農民工と海寧市の地元住民との関係性をみると、海寧市の戸籍者の「友人・知人」について、「一人もいない」は一六八人（二四・七％）、「一〜一〇人未満」は二五三人（三七・二％）、「一〇〜二〇人未満」は八五人（一二・五％）、「二〇人以上」は一四五人（二一・三％）となっている（「不明」は三〇人、四・四％）。

〈15〉私が二〇一三年に海寧市の民工学校で実施した「両親の老後」に関するアンケート調査結果をみると（対象者七四六人）、現在、海寧市で一緒に同居しているのは、「父親」が一〇・六％、「母親」が一・四％であった。また、現在、両親の介護・看護の有無は、父親では「多少援助が必要」とするのは一二・二％、「日常的に介護・看護が必要」は二・四％、母親では「多少援助が必要」とするのは一一・五％、「日常的に介護・看護が必要」は三・四％となっていた。さらに、将来の望ましい生活スタイルとして、「海寧市で同居」は二二・三％、「海寧市の施設に入居」は一・三％、「故郷で同居」は六〇・七％、「故郷の施設に入居」は三・四％となっていた。

〈16〉拙稿 [2013, 2014a, 2014b] 参照。

〈17〉私が二〇一三年に実施した徒弟制度に関するアンケート調査結果は、次のとおりである。江西省の中学校では（中学生三百人を対象）、「徒弟をやってみたい」は四四・四％、「やりたくない」は二四・〇％、「わからない」は二九・七％であった（「不明」は二・三％）。また、海寧市の民工学校では（中学生五一六人を対象）「徒弟をやってみたい」は四〇・一％、「やりたくない」は一二・四％、「わからない」は三三・七％であった（「不明」は二・七％）。さらに、具体的な業種をみると、美容師、パソコン関係（販売・修理なども含む）、コック、ケーキ屋、家畜の解体、デザイナー（アパレルや結婚式場など）、医者（針、灸など）、自動車・バイクの修理、撮影、時計修理、水道・電気工、改装（クロス張り）、彫刻（木工）、大型建設車（クレーンなど）、武術（カンフー）などの記入があった。

〈18〉拙稿 [2014a] 参照。

参考文献・資料

A・R・ホックシールド 2000 『管理される心——感情が商品になるとき』（石川准、室伏亜希訳）世界思想社
ジョージ・リッツァ 2000 『マクドナルド化の世界——そのテーマは何か？』（正岡寛司監訳）早稲田大学出版部
ジョージ・リッツァ、丸山哲央編著 2003 『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房

ジグムント・バウマン 2014 『リキッド化する世界の文化

論』（伊藤茂訳）青土社

古市憲寿 2011 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社

山田昌弘 2004 『希望格差社会』筑摩書房

中兼和津次 2012 『開発経済学と現代中国』名古屋大学出版会

アマルティア・セン 2009 『自由と経済開発』（石塚雅彦訳）日本経済新聞社

内山完造 2011 『両辺倒』書肆心水

潘沢泉 2013 『国家調整農民工社会政策研究』中国人民大學出版社

汪希望 2012 『中国民工学校外史——現役校長が語る民工学校の過去・現在・未来』『現代と文化』（原田忠直、生江明監修）第一二五号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2009 『現代中国社会分析試論——三元的社会構造としての民工問題』『現代と文化』第一一九号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2010 『民工と自由』『日本福祉大学経済論集』第四一号、日本福祉大学経済学会

原田忠直 2012 『管理しやすい心』と『管理しにくい心』——『現代と文化』第一二五号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2013 『民工（男性）の「希望」とその実現性について——浙江省H市における民工に対するアンケート調査結果を中心に』『日本福祉大学経済論集』第四六号、日本福祉大学経済学会

原田忠直 2014a 『躓きの石——確定化への誘惑』『現代と文化』第一二九号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2014b 『奇妙な宴会——アーレントは着席するか？』『現代と文化』第一二九号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

『二〇一四年中国人口和就業統計年鑑』中国統計出版社、二〇一四年一月

『二〇一四年全国農民工臨測調査』中華人民共和國國家統計局 <http://www.stats.gov.cn/>

『二〇一四年図解農民工那些事』中華人民共和國國家統計局 <http://www.stats.gov.cn/>